

2011(平成23)年7月発行

都歴研

友の会だより 5号

都歴研友の会事務局 〒191-0033 東京都日野市百草971-158 増田方
電話・FAX 042-591-1853 fwij2300@mb.infoweb.ne.jp

友の会海外研修企画

南イタリア/シチリア旅行記

矢島 恒之

「都歴研友の会」では、2008年度のローマと北イタリア海外研修の後、南イタリアとシチリア島への要望が強く出され、今回の12月3日から8日間の海外研修となった。10月29日事前学習、帰国後の2月25日に写真集の配布を兼ねて「同窓会」を行った。旅行参加者は総勢19名。



1日目 12月3日(金) 東京 ; 雨

前夜からの大雨にもめげず、朝8時の定刻前、成田に全員集合した。8日間の旅行に同行する鈴木添乗員から、説明を聞くためにいつも持ち歩くことになる「みみ太郎」(無線式イヤホンガイド)を渡される。

12時間を越える飛行の後、ローマ経由でナポリに。ところがナポリへの乗り継ぎ便の出発が大きく遅れた。何が理由か、よくわからない。イタリア時間の夜8時、イタリア最初の宿、ホリディ・イン・



ナポリのロビーで部屋のカギをもらう。日本時間では朝の4時。長かった1日目が終わった。

2日目 12月4日(土) ナポリ ; 雨

国立考古学博物館を見学

朝7時、時差ぼけ状態でホテルの食堂に行く。食堂は、他の日本人観光客の団体でいっぱい。しばらくして、やっと朝食バイキングの料理が並べ直された。8時、ガイドのロセーナさんと、こ

主な紙面

南イタリアシチリア旅行記	矢島 恒之 1
鎌倉藤沢の寺宝を訪ねて	松尾美栄子 13
山東省史跡めぐり	村上 雅盈 14
友の会総会報告	村木 逸子 17
計報 蜷川壽恵さん	17
講演「江戸から東京へ」(佐伯眞人氏)	18
お誘い<平泉と奥六郡の旅>	小澤 拓美 19

れから帰国までの間運転をしてもらうサルバトー
ルさんが紹介される。ロセーナさんの案内でヌオ
ーヴォ城（新城）に向かう。

古い卵城に代わって1284年にアンジュー家
出身のカロル1世が建築を始めた城で中央入口に
は白い大理石で造られたアルフォンソの凱旋門が
ある。しかし、この新城のまわりは大土木工事現
場の様相。新城近くで、地下鉄の工事中にローマ
時代の遺跡が発見されたため。いつ工事を再開で
きるか、いつ地下鉄が開通するか全く不明という。

新城とその近くのサン・カルロ劇場や、ブルボ
ン家の王宮、大アーケードを車窓から見学し、新
市街を経てサンタ・ルチアに向かう。新市街では、
ナポリのゴミ問題がいまだに解決していない様子
を垣間見た。

昨日から降り続けていた雨も次第に小降りにな
る。卵城前の海岸でバスから降りて、各自思い思
いに写真を撮る。沖合にはカプリ島がよく見える。

9時、開館直後の国立考古学博物館は、まだす
いていた。中央階段の踊り場に、ナポリ王フェル
ディナンド4世（両シチリア王フェルディナンド
1世）の、知恵の女神ミネルバ（ギリシア名はア
テナ）の胄をかぶった立像がある。中2階には、
ポンペイから出土したたくさんのブロンズの彫像、
鏡や杯、食器類、調理用器具や手術器具も陳列さ
れている。手術器具では、何に使ったかわからない
器具もある。ガラス製品では「青いガラス壺」
と呼ばれる濃い青の上に白く天使を描いた壺が有
名である。その他剣
闘士が用いた胄など
もあり、ポンペイの
遺跡と考古学博物館
はセットであることを
示している。

ギリシア神話から
主題をとった絵画は、
花の女神フローラ、
ケンタウロスに竖琴
を習う少年、主神ゼ
ウスや酒の神ディオ



ディルケーの拷問

ニソスの「トラに乗るバック
ス」、アンドロメダを助けるメデューサの首を持
ったペルセウスなどが目についた。

これらの絵画の絵の具「ポンペイの赤」が興味
深い。朱（水銀）や赤鉄鉱を原料に作られた絵の
具で、非常に高価なもの。この赤がふんだんに使
われ、鮮やかなまま残っている。豊かな色彩が保
たれた秘密は、ポンペイを埋め尽くした火砕流堆
積物にある。これが壁画や美術品の劣化を最小限
に食い止めたのである。世界史の教科書や図録に
よく採録されている「アレクサンドロ大王の戦い」
もこの博物館の収蔵品だが、残念ながらお目にか
かれなかった。

2階の広間の壁にも、たくさんの大きな絵画が
掛けられ、天井にもいっばいにフレスコ画が描か
れている。広い床には、大きな日時計、正確には
太陽カレンダーがある。別の部屋には、午後に行
くポンペイ遺跡のパノラマが展示されていて、そ
こで遺跡の見学コースの説明を聞いた。

1階は世界で屈指のギリシャ・ローマ時代の大理
石彫刻の間。ファルネーゼのヘラクレス像（写
真左）は、発見当初は片足がなかったので、その
足を作って陳列した。後に、失われていた片足が
出土したので、現在は、オリジナルの両足で立っ
ている。カプアのヴィーナスやファルネーゼのフ
ローラは、優美な姿。ファルネーゼの皿は、メノ
ウに杯をかかざる女神が白く浮き彫りにされた美
しい皿である。

ここで最大の大理石の彫刻が、「ファルネーゼ

の雄牛」。これは俗称で、正式の名は「ディルケーの拷問」。ディルケーは、アンティオペーがゼウスの子を身ごもったことから虐待し、奴隷のように扱った。双子のゼートスとアムビーオーンは実母アンティオペーに加えられた屈辱を晴らすため、ディルケーを雄牛に縛りつけて復讐した。苦しむディルケーがアムビーオーンに慈悲を請う姿に、緊迫感があふれる。

なお、有名なエジプト・コレクションは特別展に出品中で、残念ながら見ることはできなかった。

もっと時間をかけて見たい博物館であったが、次のポンペイ遺跡に行くため、約2時間の見学でバスに戻る。ポンペイへのバスのなかで、ポンペイ付近で醸造されるワイン「キリストの涙」のエピソードを聞いた。

ポンペイ遺跡の街を歩く

遺跡近くのレストランで昼食をとる。飲み物でのどを潤し、午前中の印象などを話しているうちに、一人ひとりにピザが一枚ずつ配られる。その大きなこと。はじめは4人で一枚と思ったほど。皆がピザを残すなかで、ただ一人、全部食べた人がいた。この食事中に、別の日本人観光客のグループがレストランに入ってきた。

昼食後の14時、スタビア門からポンペイ遺跡に入場する。スタビア通りを進むと、すぐ近くに小円形劇場（オデオン）がある。この小円形劇場は、観客席の保存状態が良好で、改造された跡がないことでも知られている。その観客席は調和のとれた姿で美しく、音響効果も優れており最上階の座席でもよく聞こえたという。ここで最初の記念写真を撮った。

スタビア通りの両側は一段高い歩道で、その縁石に馬を繋ぐための穴があいている。車道部分には丈夫な石が敷きつめら



上はフォーロ、下は居酒屋の店先

れている。車道の所々に両側の歩道を結ぶ「横断歩道」がある。大きく丈夫な飛び石で、歩道の高さで道の両側を結んでいる。この「横断歩道」の大石の間に轍の跡がある。

通りの四つ角に公共水道の噴水があり、その水を受ける枀は、楔とローマのセメントで丈夫に造られている。町の人びとが日常生活で使っていた各噴水には、そこを使用する人びとの地域を示す図が彫られている。

いろいろな家を見て歩く。金持ちの家の入口の床は、モザイク画で飾られ、また猫目石が埋め込まれたりしている。猫目石は、夜間の出入りのとき光を反射して通路を示すためのもの。医者の家は、ギリシア神話の建康・医学の神のシンボルである蛇の絵が飾っており、ここから博物館で見たたくさんの手術道具などが出土した。

居酒屋は、広い入り口を入るとカウンターがある。そこに鍋をかけ温かい食事を提供したり、温かい飲み物を提供した。

町の中に何カ所かある娼婦の館（ルパナレー）

の前の道路には、娼館を示す図柄が描かれている。ルパナーレの狭い入り口を入ると二階に上る階段がある。二階の部屋は、それぞれ独立しており比較的広い上客用のつくりになっている。一階の小部屋は、体を伸ばして寝られないほどの小さなベッドがあるだけ。壁は、娼婦たちの仕事の様子を描いたエロチックな絵で装飾されている。

アッボンダンツァ通りから、フォルムに入る。その入口の外側には車止めの石が立てられ、フォルムのなかが車馬の通行が禁止されていることを示めている。この入口から見た正面に裁判や商業上の契約など行ふバシリカがある。

ここから細長いフォルムの反対側、北側のヴェスヴィオ山の方左手に、太陽神アポロの神殿がある。円柱に囲まれた敷地のなかに高い基壇があり、階段のある正面に6本の円柱（両端の2本は残っているが、中の4本は基礎部だけが残っている）が立っている。階段の左手には日時計でもある円柱が立っている。そして、フォルムの北の端には最高神ゼウス（ジュピター又はユピテル）の神殿がある。アポロ神殿とフォルムを挟んだ反対側に、エウマキアの建築物がある。毛織物の市場や洗濯業者の組合の建物と考えられている。ここにある大きな樽に尿を溜め、ウールの生地を柔らかくしたり漂白していた。この建築物の正門は、大理石に植物の葉や、鳥・昆虫などの繊細な彫刻があることで有名である。

その北隣にあるのがヴェスパシアヌスの神殿。皇帝の守護神を祀る神殿で、中央に白大理石の祭壇をもった中庭がある。この祭壇の両面には皇帝を祀るため、現役の皇帝をたたえる儀式にちなんだ彫刻の生贄となる牡牛が浮彫されている。

フォルムの北端、ユピテル神殿のそばに公設市場（マチェッルム）がある。入口を入ってすぐ左手に、メディアやペネロペーなど神話上の人物を描いたフレスコ画の壁がある。この壁の前にポンペイが噴火によって埋没したときの犠牲者の「化石」ともいうべき遺体の石膏像が展示されている。この石膏像には、奴隷しか締めないベルトが見える。

この広いフォルムの両側には所々に円柱が残っており、円柱の上部に梁が残っているところもある。ユピテル神殿近くのフォルムの出口に、大理石の門があり、その外側にも車止めの石が立てられている。

門の近くに「フォルムの浴場」がある。公衆浴場は、ローマ人の生活にとって大切な場。ローマ人は運動の後に入浴する習慣があり、入口を通してすぐ左側に、円柱で囲まれた、運動場として使われる明るい中庭がある。右側に脱衣室（アポディテリウム）があり、その左側の入口のなかに冷水浴室（フリギダリウム）がある。冷水浴室の中いっばいに、丸い浴槽がある。脱衣室にある別の入口のなかに微温浴室（テピディリウム）、さらにその奥に温水浴室（カルダリウム）がある。温水浴室の天井や壁は、天井につく水滴を処理する構造になっている。そして、これらの浴室の天井は漆喰（スタッコ）によって浮彫が施されている。また、壁には入浴に必要な小物を置くためのニッチ（壁がん）が設けられている。脱衣室の天井には漆喰の絵画、壁には木製の棚が取り付けられていた跡や衣服、小物を掛けるところや長椅子が備え付けられ、床にはモザイクの絵がある。

公衆浴場の近くに「悲劇詩人の家」があり、少し離れて「パン焼釜の家」がある。「悲劇詩人の家」の入口の床には、泥棒よけに猛犬を描いた『猛犬注意』のモザイク画がある。「パン焼釜の家」には、製粉用の挽き臼とパンを焼くかまどが保存されている。このかまどの中から炭化したパンが発見された。またパン屋の家の中に神棚がある。各家にあるこのような神棚に、ナポリの国立考古学博物館で見た小さな神像が祀られていた。また、町のあちこちに落書きが残っており、そこには当時の選挙のようすを示すものも多い。

エルコラーノ門はナポリへの街道の起点。この門の外にポンペイの人たちの、紀元前1世紀半ばから紀元後1世紀半ばの墓がある。ローマ人は、人通りの多い道に墓を配置した。道を通る人たちに墓を見てもらい、故人やその家族の思い出を長く保ちたいと願ったからである。道路から少し離

れてポンペイ市に水を送った水道橋が残っている。

ポンペイ郊外の秘儀荘へ

ポンペイ郊外に秘儀荘がある。アウグストゥス帝時代のポンペイで重要な一族の別荘で、町の郊外にこのような別荘をもつことが、上流階級の間で流行していた。緑の空間、眺めのよい柱廊、上品な手法で装飾された部屋をもつ別荘である。秘儀荘の名は、「秘儀の間」とも呼ばれる部屋の壁面に描かれた、ディオニソス信仰への入信の秘儀の壁画にからつた。

全長17メートルの三つの壁面に、赤い背景でほぼ等身大の29人の人物像が描かれ、左から右へと入信秘儀の物語を展開している。左手、北面の壁には典礼の朗読、奉納の儀式、ディオニソスの供である男女のサテュロス、入信の恐怖におののく女性が描かれる。正面の左に老いたシレノス（山野の精霊で好色な老人、深い英知を持つ）と二人のサテュロス、一番破損がひどい中央には、玉座に陶醉したディオニソスと一緒にアリアドネー（クレタ島のミノス王の娘で、テセウスがミノタウロスを退治してクノッソスの迷宮から脱出する手助けをした）が女性の象徴に寄りかかり、右はひざまずく女性が多産の象徴「ファルス」が入った秘儀のかご「リクノン」の覆いを取ろうとしている。右手の南面の壁に続くのが鞭打ち。儀式の主人公である女性が貫禄のある女性の膝元に隠れようとしている。一番の右手は、腰掛けた既婚女性とキューピッドで締めくくられる。

トリクニリオと呼ばれる部屋にはブドウを搾るための圧縮機が2つ置かれている。ひとつは復元され、ブドウ栽培とワイン醸造というポンペイ経

済の中心となった当時のワイン製造をしのばせている。

「秘儀荘」を見学中、昼食のレストランで一緒になった、別の日本人観光客のグループがやってきた。

ポンペイ遺跡近くの鉄道の駅でロセーナさんと別れ、バスは今夜の宿ソレントに向かう。ソレントの町は、落ち着いたイルミネーションに彩られ、タッソ広場のイルミネーションは、華やかさと落ち着きを併せ持っていた。宿泊したホテル、ミケランジェロの食堂入口にあるクリスマスツリーも、木の実などを飾った落ち着いた雰囲気が印象的だった。



3日目 12月5日（日） ソレント；晴

アマルフィー海岸と大聖堂

朝8時、午前中を担当するガイドのミケーレさん案内で、ソレントから半島を越えてイタリア屈指の高級リゾート地ポジターノに向かう。この町の近くにある「エメラルドの洞窟」は、カプリ島の「青の洞窟」と比べられるという。ポジターノの手前にある見晴台から、ティレニア海に向かって立ち並ぶ地中海式の町の風景をゆっくり楽しみ、屋台で果物を買う。これから行くアマルフィーは、最盛期にはヴェネツィアと並ぶ大海洋国家として栄えていたところ。



10時少し前、海岸沿いの駐車場から国道を越えてアマルフィーの町中に入る。すぐに広場があり、その広場に面して10世紀にロマネスク様式として建築され、18世紀にバロック様式に改築された大聖堂がある。

長い階段を上ると大聖堂の入口。中央にあるブロンズの扉は、コンスタンティノーブルで鋳造され1065年に取り付けられたもの。柱廊の左奥にある脇の入口のなかは「天国の回廊」。イスラム文化の影響を受けて造られた墓地である。尖塔型のアーチが交差しながら続く回廊に囲まれた、椰子の木などの草木が植えられ噴水の水音がする明るい中庭である。「天国の回廊」の大聖堂側にある横の入口の中は、宝石をちりばめた司教冠や司教杖などの展示場。地下礼拝室には、聖アンドレアの遺体の一部が納められている。また聖像は、珍しい

クロス十字架が用いられている。この地下礼拝室の床や壁は、さまざまな色彩の大理石を組み合わせた絵模様で飾られている。大聖堂の中では司教が説教をしており、広い聖堂内部は満員であった。

マテーラ の洞窟住居へ

約1時間の見学の後、広場に面した店で買い物などをして、マテーラの町へ向かう。海岸沿いの山の中腹を通る道は狭く、急カーブも多い。大きなバスが通るのは大変だった。

午後のガイドはアンジェラさん。15時頃から、彼女の案内で世界遺産になっているマテーラの洞窟住居を見学する。高台にある近代的な都市の周辺に、洞窟住居が造られた地域、サッシ地区がある。凝灰岩の岩山の山肌の岩壁に洞窟が穿たれ、そこに多くの住居や教会が造られている。

土産物屋の屋台が並ぶ路地を抜けパスコリ広場に出る。広場のテラスから、峡谷の両側に広がるサッシ地区のほぼ全景を見ることができた。峡谷に沿ってすり鉢状に洞窟住居群が並び、住居群の間を細い道が通っている。その道は下の住居の屋根の部分につくられたもの。

洞窟住居は、換気も採光も入口からだけ。水は、雨水を洞窟住居の地下に貯めたものを使う。そして、人間と馬が同居する。隣人たちと個人的な場所を分け合い、個人的な部分が最小限の必要性までに抑えられた生活。このような洞窟住居の一つを見学した。日本語による案内も録音で流され、その説明を聞きながら見学した。この見学のときも、前に会った日本人観光客のグループと一緒に

聖像は、珍しい



マテーラの洞窟住居



なり、狭い洞窟住居のなかには人でいっぱいになった。

サッシ地区は、農業労働者や職人、労働者などが住み、住民は貧しく反乱を起こしたこともあった。このため、第二次世界大戦後、サッシ地区の経済的状況の改善と再開発が行われ、一時は、洞窟住居の多くが、人の住まないところとなった。今は、冬温かく夏涼しいことから洞窟住居が見直され、ホテルやバール、商店などとして再整備され利用されている。私たちは、マテラ見学最後に、バールでコーヒーを飲み休憩した。17時、アンジェラさんと別れ、暗くなったマテラを後にした。今夜の宿は、アルベロベッロのホテル、コッレ・デル・ソーレ。

4日目 12月6日(月) アルベロベッロ；晴

白い壁と円錐屋根のトゥルリ

イタリア半島の「長靴の踵」の付け根の部分にある、丘の上の町アルベロベッロ。コッレ・デル・ソーレ・ホテルは、町の外れに建つ。8時、在住日本人ガイドの豊さんの案内で、三角屋根のトゥルリの集落が広がる旧市街のアイア・ピッコラ地区とリオネ・モンティ地区まで、歩いて行く。トゥルリは石灰岩の白い壁に灰色の円錐形の屋根を持つ建物である。旧市街の東側はアイア・ピッコラ地区で、この地区のトゥルリの多くは、石灰岩の厚い壁が建物内部を冬温かく夏涼しくすることから、今も住居として使われている。最近ではセントラルヒーティングが施された家もあるという。

トゥルリをつくっている石灰岩は、この地域では畑を耕すたびに幾らでも出てくる。畑の隅には、石灰岩の小山がいくつも散在し、道路との境は、この石灰岩で壁が作られているところも多い。

トゥルリの屋根の上の煙突に風見のようにも見える飾りがある家がいくつもある。屋根の下、破風のような位置に聖者の像が飾ってある家もある。また屋根に十字架などのマークを白く記した家も目についた。

東側のアイア・ピッコラ地区で、1930年代



につくられた道路のマンホールの蓋に、藁の束と斧をアレンジした紋章が記されていた。藁の束と斧をファッショといい、ファシズムの語源、シンボルで、それがこんなところに残っていた。

西側のリオネ・モンティ地区はトゥルリが土産物屋などになっている商業地区で、坂を上ったところにトゥルリの小さな教会がある。リオネ・モンティ地区からホテル前に止まるバスまで、自由行動。三々五々歩いて帰った。このアルベロベッロ見学中にも、いつも出会う、別の日本人観光客のグループと出会った。

アルベロベッロの次は、シチリア島。アドリア海に近い「長靴の踵」の付け根から長靴のつま先までの430kmを、一日かけてバスで走破する。左手に時折タラント湾を望見しながらバスに揺られる長旅。この時間を利用して、村木さんたちから、教会建築やキリスト教などについてレクチャーがあった。

昼食のため町に立ち寄ったとき、子どもたちの下校時間とぶつかった。親が学校まで子どもを迎えにやってくる。車を使う親も多く、道路は二重駐車状態であった。

夕方、やっと右手にティレニア海が見えてきた。夕闇のなか、フェリーでメッシーナ海峡を渡る。宿はシチリア有数のリゾート地タオルミーナのホテル、ヴィラ・エスペリア。

5日目 12月7日(火) タオルミーナ

; 晴(暑い)

ギリシャとノルマンと アラブのシチリア

リゾート地タオルミーナのホテル、ヴィラ・エスペリアはゆったりしたプールとプールサイドに並ぶサンデッキや窓のベランダのサンデッキが日光浴客をさそっている。窓からイオニア海を見ると、海上はるかにイタリアの「長靴」のつま先が見える。ホテルの入口に大きなサボテンがあり、冬の間イギリスなどからの滞在客が多い、避寒地らしさを強調している。

朝8時、ホテルを出発した後、途中で小型バスに乗り換えてタオルミーナの旧市街に向かう。メッシーナ門から入り、ウンベルト1世通りを「4月9日広場」まで歩く。道の両側は商店街。服屋の窓に赤い下着がいっぱい。ガイドのジョセフィーナさんから、男女とも新年には赤の下着を着ける習慣があることを聞いた。

「4月9日広場」の端は見晴らしのよいテラスで、眼下にイオニア海が広がっている。海岸線に沿って南の方を見ると、富士山のような形のエトナ山がそびえ立つ。広場は、正面にサンタゴスティーノ教会があることから、元は、サンタゴスティーノ広場と呼ばれていたところ。イタリア統一戦争中の1860年4月9日、ミサが行われていたとき、ガリバルディがシチリアに上陸したとの話が伝わり、市民達は大喜びした。これにちなみ、解放の記念として、広場の名を「4月9日広場」と改めた。広場の横にアラブ時代に建てられた時計塔がある。

広場からメッシーナ門の方に戻ると途中に、ギリシア植民市のころのアゴラ跡といわれる、小さな広場がある。その広場の前に、コルヴァヤ宮と聖カテリーナ教会がある。コルヴァヤ宮は11世紀から15世紀の複合建築で正面上部の2連窓が美しい。コルヴァイヤ宮に隣接する聖カテリーナ教会は、17世紀に建設されたもの。しかし、この教会は、ギリシア時代の神殿の上に造られたローマ時代の音楽堂“オデオン”の、更にそれを覆



4. 9広場からエトナ山を望む

う形で建てられたもの。教会の背後で、今もなおオデオンの遺構の一部を見ることができる。

この広場から海の方に進むと、大きなギリシア劇場がある。ローマ時代に、この劇場は舞台を円形から半円形にされ、入口周辺と観客席の最上部にアーチ構造の施設がつくられるなど少し改造された。扇型になっている客席の上部に上ると、遠くにエトナ山が見え、手前にはイオニア海が広がる(1ページ写真)。夏の間は、今でもこの劇場でコンサートや演劇などが演じられている。

ギリシア劇場と広場を結ぶ道や広場のまわりは、土産店でいっぱい。ここでグラニータ(イタリア風かき氷)を食べたり、八百屋の屋台でサボテンの実を買うなどした。町の人が日常の礼拝に通う小さな教会があった。参拝する老婆につられて中に入り、ゆっくり見学した。ある店の2階の窓で、

縄ばしごを上るサンタクロースの人形を見つけた。

ご存じのように、サンタクロースは北欧の習慣。サンタクロースを飾ったり、クリスマスにプレゼントをする習慣は、イタリアではまだ少ない。



チェファルーのノルマン人

10時半すぎ、イオニア海に面したタオルミーナを出て、次の見学地チェファルーに向かう。メッシーナの町を過ぎたころ、ティレニア海に浮かぶ島が目に入った。チェファルーの旧市街のレストランで昼食を取る。15時少し前から、ガイドのジョゼッピーナさんの案内で、旧市街を歩いて見学する。家々の間はアラブ時代の名残り」と説明された、一人がやっと通れる路地も多い。この見学中、建物のベランダには特別に税金がかかることや、アラブ時代の名残から、新年を迎えるとき鍋やフライパンなどの古いものを窓から捨てる習慣がシチリアの南部には残っていると教えられた。旧市街の一面の地下二階あたりの深さに、「洗濯場」がある。ローマ時代には、夏は、ここは足を水につける「風呂」として用いられたとのこと。

旧市街の海岸よりに「漁師の門」がある。この門の外側はギリシア時代にさかのぼる旧港。映画「ニュー・シネマ・パラダイス」のロケ地にもなったところで、浜辺には小さなボートなどが引き上げられている。(写真右下)

「大聖堂」(写真右上)は、旧市街の山に近いところにある。12世紀前半にルッジェーロ2世が、しけの海で遭難し、このチェファルーに漂着して助かったことを聖母に感謝するために建立した、アラブ=ノルマン様式の教会建築である。鐘楼の上層部はアラブ様式の鎖の文様。教会正面入口の大扉はみごとな浮彫のある大理石で飾られている。



中世以来の洗濯場

教会内部にはバジリカ様式の跡も残るが、ロマネスク式と初期ゴシック式が混ざったもの。尖頭アーチはアラブ様式。それを支える16本の円柱は、ギリシア時代の神殿の太い円柱を再利用したもの。柱頭は、美しい彫刻が施



チェファルーの大聖堂

されている。この円柱で内部は三廊に分けられている。一段高い内陣の円天井に



は、ビザンツ様式のモザイク画でやさしい表情のキリスト、聖母と使徒、大天使などが描かれ、内陣の壁には長老、預言者と聖人が描かれている。なお、この教会は、17~18世紀に修復され、バロック様式化された。左身廊には12世紀のロマネスク様式の洗礼盤があるほか、床には信者が踏んでもらうため司教の墓がある。内陣の手前、右手にはノルマン時代のベランダの説教壇がある。教会の後部はステンドグラス。屋根を支える木の棟木もはっきり見える。

明日の、聖母マリアが、その母の聖アンナの胎内に宿ったことを記念する「無原罪の聖マリアの祝日」を祝うミサのため、花束をマリア像に飾るなどの準備が盛んに行われていた。なお、この教会に、ルッジェーロ2世の墓がある。

今日の宿泊地、パレルモ市内は、明日からの聖母祝祭休日を前に華やかなイルミネーションで彩られ、道路は車であふれている。ホテルの場所が見つからなくて、パレルモ市内をバスで走り回る。運転手のサルバトーレさんは、交差点で止まると窓から顔を出して通行人に道を聞くなどしてホテルを探す。2時間ほどたった19時頃、やっと今日の宿、アストリア・パレスに到着した。

6日目 12月8日(水) パレルモ;晴
(暑い)

パラティーナ礼拝堂(ノルマン王宮)

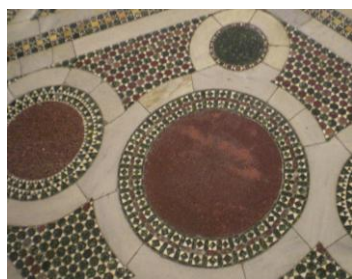
ノルマン王宮は、11世紀にアラブ人が築いた城塞を、12世紀にノルマン人が拡張してアラブ＝ノルマン様式の王宮としたところ。「ここは絶対の見学スポット」と主張して、見学をお願いしたところである。ここを一番で見学するため、ホテルを7時半過ぎに出発した。ヴィットリア広場でバスを降り、在住日本人のガイドの川村さんの案内で、車の交通が多いヌオーヴァ門を通過して王宮に向かった。王宮ガイドのヴィーノさんも加わり、王宮を見学する。王宮は、現在も州議会議事堂として使われており、入口には守衛が立っている。正面右手に見える「ピサーナ塔」は、ノルマン様式の原型が残っている。

祝日の朝で時間も8時30分と早いため、いつもは行列ができる入場者入口に人影はない。ルッジェーロ2世が使った馬車が飾られた大階段を上って二階に上がると、一階と同じように、中庭を



囲む円柱で飾られた柱廊が巡っている。(写真左) 柱廊の床もモザイクの見事な装飾。ここを通過して、王宮の宮廷附属礼拝堂であるパラティーナ礼拝堂に行く。

パラティーナ礼拝堂は、パレルモのノルマン芸術を代表する教会建築である。その建造には、ノルマン人だけでなく、アラブ



人・ラテン人が活躍した。内部は古代建造物の円柱を利用した尖頭アーチによって三廊に分かれている。「ラテン式」の三廊の構造と、身廊の最高部に置かれた「ビザンティン式」の至聖所が結合された混合様式である。この混合様式が中世シチリアの教会建築のモデルになった。主祭壇がある後陣のアーチの天井に「祝福を与えるキリスト」の大きなモザイク画がある。後陣と至聖所の壁のモザイク画は「キリストの生涯」、側廊のモザイク画は「聖ペテロと聖パウロの生涯」である。格天井には複雑な星の図。壁と床を覆う幾何学紋様のモザイクは、イスラムとビザンチンの融合した様式で、コズマーティ様式といわれる。説教壇や復活祭用の燭台は、ロマネスクの様式で、まさに混合様式そのもの。

この見学で、床などの幾何学紋様のモザイクが日本の「うろこ柄」や「矢羽根」「籠目柄」などとよく似ていることが話題になった。(写真下)

パラティーナ礼拝堂をもっと見学したかったが、日程の都合で早々に出発する。9時過ぎにはバスでパレルモ郊外の町、モンレアーレに向かう。パレルモの後背地に当たる丘の上の町で、オレート峡谷と「コンカ・ドーロ(黄金の盆地)」を見下ろしている。階段を上り狭い道を通って、モンレアーレの旧市街の端にある広場に面した大聖堂

(ドゥオモ)に行く。この大聖堂は、シチリアに残るノルマン芸術の最高峰とたたえられ、「世界で最も美しい寺院」とも言われる教会である。

11世紀の終わりに、フランスのノルマンディー地方からやってきたノルマン人たちは、シチリアでイスラム文明に接してその水準の高さに驚き、初代シチリア王ルッジェーロ2世は、子どもの教育をイスラム教徒にゆだねたという。第3代国王グリエルモ2世は数ヶ国語に通じた教養豊かな名君で、宗教に対して寛容で、大地震が起こったとき「各自の信ずる神に祈れ」と言ったことが、伝えられている。

大聖堂は12世紀後半に、そのグリエルモ2世の援助によって建立された。大聖堂の正面は、上層部がアラブ装飾の交差アーチ、下層部が18世紀後半に付け加えられた柱廊。正門には12世紀にフィレンツェで作らせた「天国の門」を表すブロンズの扉が据えられている。教会への入口扉は柱廊左側にある。内部は円柱によって三廊に分かれ、柱頭は優れた技術の彫刻が施され、その上の副柱頭は、ギリシアの神々や葉、果物のモザイクで覆われている。この円柱がアラベスク風の尖頭アーチを支えている。床は御影石と斑岩の幾何学模様のモザイク張り。身廊、翼廊、アプスの壁には、ビザンティンの職人の手による金色を背景としたモザイク装飾が一面にほどこされている

(写真上)。画題は新約・旧約の聖書からとられた物語である。この建築に当たって壁作りの職人はマグレブから、モザイク職人はギリシアから呼ばれた。



モンレアーレの大聖堂

なお、天井は1800年頃火災にあい改修されたものである。

内陣には玉座と司教座が向かい合っているが、玉座の方が少し高い。これは教会を支配下に置こうとする国王と、これに反発したローマ教皇・大司教との権力争いの結果、教会側が支配するパレルモ大聖堂に対抗して、国王がこのモンレアーレに新たに大聖堂を建立したことによる。

また、この聖堂のパイプオルガンはシチリアで一番という。側廊には、白大理石でグリエルモ2世の石棺が、赤大理石でその父親のグリエルモ1世の石棺がおかれている。

教会の壁に描かれた聖人たちは、イスラムの建築技術で、12時ごろになると、その月の聖人に窓から日の光が当たるようになっている。

大聖堂見学の後、オレート峡谷と「黄金の盆地」を見下ろす、大聖堂裏のテラスに行き、その景色を楽しんだ。ここには特異な姿をした大きなカポックの木がある(写真下)。

10時30分頃バスでパレルモに戻り、ガイドのピーノさんの案内でパレルモの大聖堂(司教座聖堂)を見学する。大聖堂の隣は博物館でもある大司教館。

大聖堂の正面玄関は、ゴシック装飾。南面柱廊の浮彫りはカタロニア=ゴシック。鐘楼にはイスラム風の植物や抽象模様の彫刻がほどこされている。内部は18世紀に改築され、角柱が並ぶ三廊式のネオクラシック様式。角柱の柱頭には後陣を飾っていた聖人像の複製が置かれている。なおこの大聖堂の南側の側廊に、国王たちの亡骸を納めた斑岩の石棺が祀られている。また、内陣右側に『聖ロザリア礼拝堂』がある。ここの聖遺物器のなか

にパレルモの守護聖女ロザーリアの聖遺骨が納められている。

アグリジェントの「神殿の谷」

12時少し前にパレルモを出発し、シチリア島中央の山脈を越え、アフリカよりの海岸にある、今回の海外研修最後の見学地アグリジェントに向かう。「神殿の谷」に近いレストランで遅い昼食を取る。「神殿の谷」は、古代世界の神々に捧げられた数多くの神殿などの聖所があるところで、アグリジェントの町がある細長い丘のふもとに広がる谷間にある。

15時近くになったが、在住日本人ガイドの中野さんの案内で見学を始めた。「神殿の谷」の最も高い位置、「神殿の谷」の南東の端にヘラ（ジュノー）神殿がある。この神殿は婚礼の儀式が行われた場所で、女神ヘラの祭日に行われたスポーツ競技会は、女性だけが参加して行われた。

神殿は、前450～前440年ごろの建築とされ、東向きに建てられ、四面を円柱で囲む柱廊で飾り、内陣にはヘラ女神像が安置されていた。今は、四面の円柱だけが残っている。

「神殿の谷」の中心に位置し、周囲の谷を見下ろすように建っ

ているのがコンコルディア神殿。ドーリア式神殿で、屋根がないだけの無傷な姿で残っている唯一のもの。シンプルな外観とバランスのとれた構造から生じる見事な調和を醸し出している。前430年頃の

建築とされる、典型的なギリシア古典様式の神殿である。ドーリア式円柱の柱頭には、アバクスと呼ばれる正方形の頂板が置かれ、その上に置かれ

た主梁の上にペディメントが翼を広げた鷹のように君臨している。このペディメントには、止め金やかすがいが使われていない。雨水は、ライオンの頭を形取った樋から建物から離れて流れ落ちた。

このコンコルディア神殿の保存状態がよいのは、6世紀末ごろからキリスト教の教会として使用されたためで、その当時の正面は、西に面した神殿の裏側である。教会時代に内陣などの壁が一部改築されている。西日を浴びながら、ここで最後の記念集合写真を撮った。

アグリジェント最古の神殿（前520年ごろ建築）がヘラクレス神殿である。現在の姿は、1924年英国人考古学者ハードキャッスル卿が私費による復元作業で建てたもので、地表に転がる廃墟の山と数本の円柱が立っているだけ。しかし、堂々と突き上げるように存在する力強さは、英雄ヘラクレスの力を象徴している。

遠くに見えるディオクリス（カストルとポリュデケウス）神殿は、角の部分のわずか4本の円柱しか残っていないが、発見された遺構から、この神殿の装飾の美しさは格別で、視覚に直接訴える華麗な神殿であったと推測される。

駐車場に近いところに広がるのがゼウス神殿。

神殿の面積の広さと円柱の大きさは、ギリシア世界で一番大きいもののひとつ。この神殿は、本来ドーリア式であるが偽足型という唯一の特異なフォームで作られたもの。神殿を壁から離



した円柱で囲むのではなく、円柱自体が神室の壁と連なり、一体となっている。このゼウス神殿の遺跡に、数日前に発見されたばかりの人像柱が横

たわっていた。長さ8メートル弱の巨大な石像で、神殿を支える柱の一部だったと考えられている。これまでも数体が発見されており、オリジナルは州立考古学博物館に展示され、「神殿の谷」にはレプリカが展示されている。この人像柱は、アトラスの像と考えられており、円柱と円柱との間に、神殿の重圧を支える円柱の補助として用いられ、全部で38体あったと考えられている。

夕闇の中、ライトアップされた「神殿の谷」に別れを告げ、パレルモに戻る。

今夜の宿も、昨日と同じアストリア・パレス。バスを降りたとき、鈴木添乗員から、日本の留守宅に送るよう、切手を貼った絵ハガキが配られた。最後の夕食会で、全員が一言ずつ感想を出しあったのち、いろいろ世話をしてくれた添

乗員の鈴木さんに、増田団長から感謝のプレゼントを渡した。

7日目 12月9日(木) パレルモ ; 晴

イタリア最後の朝、パスポートやバスの荷物をチェックした後、6時前にホテルを出発する。空港での手続きの手助けをするエルリーラさんもバスに同乗した。イタリア北部は吹雪で、ミラノ空港は閉鎖中とのこと。ミラノ経由で帰国予定だった、いつも一緒になった別のグループは、急遽ローマ経由に変更になった。その荷物の積み込みで、パレルモ空港で飛行機の出発が少し遅れた。ローマには予定通りの時間に着き、日本行の便に無事乗り継いだ。明日の朝は、成田である。

鎌倉・藤沢の寺宝を訪ねて

都歴研 秋の見学会



松尾美栄子

11月3日は、晴れ上がった青空に久しぶりに秋を感じる日でした。9時、円覚寺前集合。「鎌倉・藤沢に非公開の寺宝を訪ねる」見学会は総勢30名で出発しました。突然本誌へ本日のことを書くようにと依頼され、私のさわやか気分はいっぺんに吹き飛んでしまいましたが。さて、前置きはこれくらいにして...

最初は円覚寺です。本尊は宝冠を戴いた釈迦如来、他にも頭巾の地藏菩薩もあり、被り物の仏像はめずらしく、興味深く拝観しました。仏殿の奥に国宝の舍利殿がありました。こけら葺きの屋根は二層で、先が少しそりあがり全体にゆるやかなカーブをえがき、下の欄間は波形になっています。舍利殿のあたり一面には静寂な空気が漂っています。建物そのものからも崇高で近寄りがたい美しさと貫禄のようなものを感じました。ここは、寺の中の修業の聖地であるという雲水の説明に深く納得しました。宝物の

展示会場では239点が所狭しと展示されています。内116点が重文です。それだけでもこの寺の格式が感じられます。禅寺だけに五百羅漢図が多く目に付きました。雲水に五百羅漢と十六羅漢の違いを訊ねましたところ、「それは七里ないのに七里が浜、九十九里ないのに九十九里というのが如しで、特に数字に意味はありません。数にこだわらないように」という禅問答のようなお答えを戴きました。教科書でおなじみの、北条時宗、後醍醐天皇、北条貞時、足利尊氏、一休等々鎌倉時代の有名人の書が並び、圧巻です。それぞれ立派な筆跡ですが、足利義満の書だけは子供のようなぎこちない筆跡で、権力者の意外な一面を見たような気がしました。また、後土御門天皇の書は枠どりされた文字の中を黒く塗っただけと知って驚きました。まるで塗り絵です。そんな書があるんですね。筆跡をみていると、なんとなくその人の心情や人柄が想像されて、歴史上の人物が身近に感じられてきます。おもしろいと思ったのは、

狩野探幽やその子探信の達磨図です。大きく見開かれた目、口も大きく開いていて驚いたような表情にみえます。おまけに開いた口の中からはもやもやと毛がでています。(もしかして達磨大師が「喝!」とっている姿かもしれませんが…)他にもユーモラスな狸和尚の図もあり、雲水の遊び心をかいま見たような気がしました。

釈迦の涅槃図も数点ありましたが、どれも右上に母の摩耶夫人が描かれています。中の一幅にメタボな釈迦が横たわっていました。(メタボな釈迦は違和感を感じますね〜すっきり描いてほしいものです)。円覚寺を出て山内街道を進み、建長寺につきました。建長寺は北条時頼が創立し、開山は蘭溪道隆です。建長寺は刑場だった土地に建立したため、本尊に地藏菩薩を拝しています。三門の右手に国宝の梵鐘がありました。展示物は57点、重文は11点、国宝2点でした。国宝蘭溪道隆像は59歳の時の自賛が書かれています。像は細面の女性っぽい人物に描かれています。国宝、大覚禅師法語規則は、「参禅弁道に専心すべきを説き規則を述べ、違反者に罰を課している厳格な禅風をうかがわせ

る資料」(目録より)です。目前の人がこの規則をスラスラと読み下しているのを聞き、このように読めると楽しいだろうなとوراやましく思いました。建長寺ではお抹茶の接待を受け、ホッとしました。ただ、「建長寺のお守りをダウンロード」できるようにになっているのには、少々驚きました(IT時代ですね)。その後、極楽寺、長谷寺へとまわり、長谷寺では縁起絵巻をみて、江ノ電で藤沢の遊行寺へ。そのころには日は暮れかかっていましたが、住職さんが待っていてくださって、本尊の阿弥陀仏の前で、遊行寺の由来、時宗の開祖一遍上人について丁寧に話をしてくださいました。5時に境内の「敵味方供養塔」(禅秀の乱の戦没者を敵味方の区別なく供養し霊を弔うため建立した博愛思想をあらわす碑)の前で解散しました。もう日はとっぷりと暮れていました。2万歩は歩き、鎌倉を満喫した充実した一日でした。案内して下さった講師の先生や計画をたてて下さった先生方に感謝しながら帰路につきました。ありがとうございました。

全歴研夏季史跡見学会

山東省史跡めぐり

孔子・孟子の故地を訪ねて

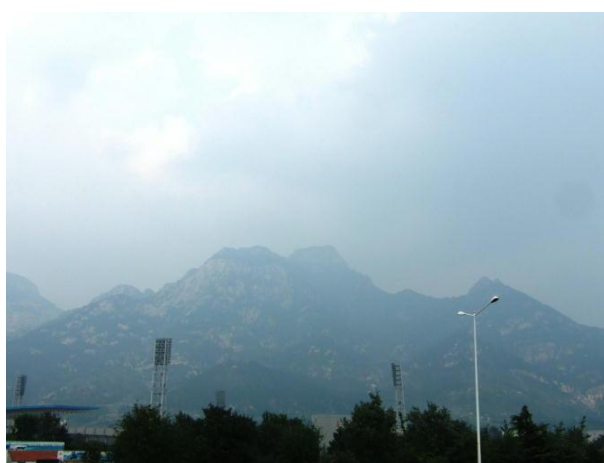


村上雅盈

今年は中国の山東省史跡めぐりで、曲阜・青島・威海など廻った。前々から行ってみたい場所だったので、参加させていただいた。団長は全歴研会長のI氏、総勢13名で友の会からは代表M氏はじめ5~6人が参加した。

山東省(=泰山の東側にある省という由来)というと、私たちの関心は半島東部の青島や威海にむかうが、その西部は黄河が東北流して渤海に流れる地帯で、黄河文明の誕生の地に含まれる。

したがって今回の山東省史跡めぐりは、黒陶文化(=龍山文化)から現代中国までをめぐった旅である。中国4000年を総走行距離約1400kmで走り抜けたタイ



南麓から眺めた泰山の山塊

ムトラベルの旅でもあった。

なお、山東省の略号は「魯」で、ナンバープレートは「魯B 456××」のようになっている。約2500前に孔子が生まれた国の名を省の象徴にしていることに、この国の人々の歴史意識の一端を垣間見た思いだ。

※8月18日

現地時間13時頃、青島空港に着き、中型バスでひたすら約250km離れた淄博市を目指した。

淄博市に入り、最初に見学したのが管仲紀念館である。管仲（?～前645年）については、「管鮑の交」しか知らなかったが、春秋時代（前770～前403）に斉の桓公に仕え、富国強兵の前提は民生の安定と規律の高まりだと内政改革を展開し、この時代の名宰相と評価されているのを知った。世界史の教科書などに「春秋の五覇」とある「斉」とめぐり会ったのである。

次に見学したのが「殉馬坑」であった。始皇帝の兵馬俑のようなものだと勝手に想像していたが、本物の馬が600頭以上密集埋葬されていた。馬たちは酒を飲まされ泥酔状態で次々に埋められたと聞いた。これは斉の景公（在位前500年前後）の墓で、彼は奢侈でしかも馬と犬が大好きで、宮殿ではたいへんな数を飼育させていたとある。

この殉馬坑からバスで少し移動した場所に、「斉国故城垣遺跡」という、斉が南隣の国の魯との間に築いた城垣の遺跡も見学できた。

さらにこの殉馬坑の付近には「西周」（前1100年頃～前770年）時代、前800年代の城の故地という碑もあり、私たちは春秋時代以前の「周」の時代にもめぐりあった。

※8月19日

朝一番で、淄博市の周村にある明末清初以来の店舗が軒を連ねている商店街を見学した。この名物である周村焼餅（＝ごく薄い煎餅）の由来書に、周村は漢代に周辺の養蚕地帯を背景に絹の一大集散地となりシルクロードの起点となったとある。

また、大清郵店という郵便局で買った記念封筒には、「周村是中国古代重要商埠、是明末清初中国北方地区

的商品集散中心」とある。

次に西にむかい章丘市の城子崖博物館をめざした。ここは薄手で黒色の光沢がある土器が最初に発掘され、黒陶文化（＝地名から龍山文化ともいう）の名がつけられた地である。黄河文明の最初の彩陶文化の次の文化で前2000年ころ始まった。私たちは前2000年まで遡ったわけである。

予定では済南市内で昼食だったが、泰山を眺めたいというメンバー全員の意向で南にむかい、泰安市にある泰山の南麓のホテルで昼食となった。

泰山の標高は約1500mで、山国の日本人の感覚では平凡に思えるが、黄河文明に引き続き君主・皇帝を誕生させたこの地域では最高峰で、なかなか山容のよい岩山で、「天命」によって君主・皇帝になったという封禅の儀式をやるには格好の山である。だから中国五大名山の筆頭となった。

泰山と別れ、南下し曲阜市にむかう（?博～曲阜は約250km）。いよいよ孔子の故地に触れることができる。尼山夫子洞とは、臨月にも畑仕事に出ていた母が産気づき、家に戻る途中にそこで孔子を産んだという小さな洞穴である。

※8月20日

三孔として世界遺産となっている孔子を祀った孔廟、代々の直系子孫が居住した孔府、孔子と子孫代々の墓域である孔林を見学した。

黄河中・下流域に彩陶文化や黒陶文化を経て、粟・黍などを栽培し豚・馬・牛を飼育する集落＝邑が小さくたくさん形成され、それを基盤にして前1600年ころ最古の王朝である殷が成立した。前1100年ころ周が殷をほろぼし華北を支配して、一族や功臣を諸侯として封地を定め国をたて

させ、周王はその盟主となる仕組みとした（周の封建制）。この周王朝の基礎を礼楽学制で固めたのが、孔子がもっとも尊崇する周公旦であった。前8世紀頃から遊牧民の華北への侵入が激しくなり、それに対抗するために牧歌的だった周の諸国は富国強兵をめざすようになった。この段階で、従来の祭祀的権力（＝神権）を越えた、一国を基盤とする政治権力を握る君主が登場したのである。だが、君主やその家臣たちは、

この権力の使い方が大変に未熟かつ幼稚であった。陰謀・裏切り・謀殺・殺戮・奢侈・淫乱・・・。

その権力の行使の未熟さ・幼稚さに対して、さまざまな思想や学説が表明され諸子百家が出現したのである。

孔子は家族道徳（孝・悌）を基礎にして天下に仁を広める徳治主義を主張したのだ。孝行や悌友は当たり前のことだと思うが、権力を握った君主たちの親子・兄弟間での裏切・謀殺などは日常茶飯事であった。だからこの孔子の徳治が心ある人々をとらえ、孟子や荀子などに受け継がれ、儒学とよばれるようになった。

前2世紀、漢の武帝は儒学を人間社会の秩序学と理解し、現権力者には都合がいいから、儒学を官学とした。以来歴代皇帝により孔廟や孔府の増改築が行われ、孔子の子孫には子孫ということだけで封賞や称号が授けられた。

次に周公旦の廟を見学し、昼食後、南の錦城市にある孟子廟・孟子林にむかった。

性善説を説き仁義を強調し革命を是認した孟子は、中国では「亜聖」とよばれていた。

孟子の墓石も割られた跡が修復されていた。これは約50年ほど前の農民一揆の時に割られたという。文字を習わなかった農民たちにとって、儒学は地主たちが自分たちの要求を言いくるめる屁理屈だったから、「亜聖」の墓といえども一揆になったからには破壊の対象であった。

午後3時過ぎ、約400km東の青島へむけてバスは走り始めた。



「大成至聖文宣王」孔子の墓石。
文化大革命期に割られ修復されている。



「亜聖」孟子の墓石

※8月21日

青島から片道約250kmある威海市にむかう。山東半島東端北側の威海は、遼東半島南端の旅順までの海上直線距離が約160km、北京・天津の海である渤海と朝鮮半島との間の黄海を守る要衝で、明の時代から倭寇対策の軍が屯営し威海衛とよばれていた。

清朝末期、威海湾に浮かぶ劉公島に、ドイツで建造された甲鉄艦「定遠」「鎮遠」を主力とする北洋海軍の提督である丁汝昌の提督署があった。

私は当時の日清間の対立が、人と人が殺し合う戦争になるほどのものだったとは思わない。しかし戦争になり、1894年9月17日、連合艦隊と北洋海軍が交戦した黄海海戦があり、劣勢になった北洋海軍は以後この威海湾に籠もった。

制海権を握った日本軍は優勢に戦局を展開し、遼東半島の大連・旅順を占領した。翌年2月、日本軍は威海衛を占領し、提督丁汝昌は自決した。

ここは日清戦争の最後の決戦場である。

その提督署の建物が「中国甲午戦争博物館」になっていて、自決の部屋や大砲が展示されている。しかし、現物展示だけでは物足りないからか、3年ほど前に船着場の隣りに大きな博物館の陳列館が建設され、戦争への経緯や過程が詳しく解説されている。例えば、日本軍による旅順虐殺の犠牲者数は約2万人と掲示されていた。

1898年にこの威海衛をイギリスが租借したので、イギリス兵舎の建物も残っていた。

※8月22日

青島市内の史跡見学。でも午後1時40分離陸予定の飛行機に乗らなければならない。

日清戦争後の三国干渉で清王朝に恩を売ったドイツは、宣教師殺害事件を口実に1897年11月14日、膠州湾口の青島に武装上陸し、99年間「租借」という新形式の領土獲得を実現した。

最初に見学した信号山公園は高さ100m



劉公島に保存展示されている
1880年代にドイツのクルップ社
が製造した大砲のひとつ

ほどの山で、占領したドイツ軍は司令官の名を取ってディーリッヒ山としたが、頂上に作られた航海信号旗台から信号山ともよばれた。また、新支配者ドイツは

総督の邸と監獄をドイツ建築で建てた。それが二番目・三番目の見学地であった。

1914年11月7日、日本軍は青島のドイツ軍要塞を占領した。信号山は日本軍司令官の名前から神尾山と命名されたという。

翌1915年、日本政府は中華民国政府に「対華21ヶ条要求」を突きつけて、山東半島のドイツ権益の日本

への継承を承認させた。1919年のパリ講和会議でこのことが追認されたので、5月4日北京大学学生らの抗議運動が起こり、これが五四運動として全国に広まっていた。このような情勢のなかで、1922年日本はワシントン会議と並行して日中間で交渉し調印した条約に基づき、権益を返還し山東半島から撤退した。

日中戦争突入の翌1938年、日本海軍が青島を占領し軍政を布いた。ドイツ監獄の地下に水牢を作って、反日知識人などを拘束し拷問したという。

最後にその松の「青」さで地名の元になったという小島、小青島を見学した。

強行軍であったが、収穫の多い有意義な史跡めぐりであった。発案されたI会長、企画実行した東武トラベルのI氏、現地ガイドさん、運転手さん、同行の皆様、ありがとうございました。

◆第5回総会報告

◆2011年度総会は、6月11日(土)午後2時から都立戸山高校で開催されました。

増田代表世話人の挨拶に続き、鍵山世話人が議長に選出され、議事に入りました。

前年度事業報告では、3月に実施予定だった「都歴研主催 春季史跡見学会—多摩 新撰組のふるさとを辿る」が東日本大震災のため中止となり、友の会特別企画「飯高檀林など北総の文化を訪ねる旅」も中止となったと報告がありました。都歴研企画は今年度実施される予定です。友の会企画は訪問先が被災地のため、実施予定がたっておりません。

◆会計報告では、収入の部において7名の方からの寄付金があり、会員数の増加が図れないなかで健全財政維持に役立っている旨の報告がありました。会計監査より4月19日に監査が実施され「適正におこなわれている」との報告がありました。本研究会は会計年度が6月1日～5月31日となっていることが確認されました。

◆2011年度の世界話人については前年度と同じメンバーになりました。事業計画としては全歴研海外研修旅行「中国東北地方史跡めぐり—王道楽土の

あとを訪ねて—(8/17～8/21)」への参加、友の会の自主事業「平泉・奥六郡の旅」は、東北復興支援、世界遺産登録を記念して秋に実施の予定です。都歴研主催の講演会、史跡見学会への参加は例年通りです。2011年度予算案の承認をもって新しい年度へのスタートがきられました。

◆総会終了後、会場を移し、都歴研主催の講演「東京都独自科目『江戸から東京へ』—その活用と小中高の連携」に参加しました。(講演内容は次ページに掲載)

講演終了後、本会の増田代表世話人から内田和博都歴研会長に『援助金』が渡されました。本会の活動の主たる目的は現役の先生方の研究活動へのささやかな支援であり、今年もそれを果たすことができましたことを会員の皆さまにご報告いたします。(村木記)

◆友の会会員の蜷川壽恵さんが、去る6月13日に大腸ガンのためお亡くなりになりました。享年86歳。昨年全歴研岡山大会にもご出席されるなど、長い間都歴研顧問としてご指導をいただきました。ご冥福をお祈りします。

東京都独自科目『江戸から東京へ』

—その活用と小中高の連携

講師 佐伯 眞人氏

講演は、今年度東京都教育委員会が発行した『江戸から東京へ』に関連する内容です。

「東京都独自科目」というのも聞き慣れない言葉です。東京都教育委員会のホームページも参考にこの件について要点を抜粋して予備知識を得ることにします。



テキスト「江戸から東京へ」とは？

昨年12月16日、東京都教育委員会は次のような趣旨で「江戸から東京へ」というテキスト（教科書）（案）を作成し、内容を都民に公開しました。

「日本人としての自覚を高めるため、高校生に日本史を継続して学ばせることが重要である、という基本的な考えに基づいて、都立高等学校における日本史の必修化を決定し、東京都独自の日本史科目「江戸から東京へ」を開発することにした」

テキスト表紙左上には「都立高等学校 地理歴史科用 平成23年度版」と書かれています。このテキストは3月22日に発行、4月には全都立高等学校の生徒と教員に配布されました。平成24年度から全ての都立高校で日本史を必修にすることを前提に、23年度から先行実施する高校を設定し、既に使われているということです。

都民からも意見を求め、改訂も進めていく予定で、紀伊國屋書店（渋谷・新宿・吉祥寺）、八重洲ブックセンター（東京）、オリオン書房（立川）、ジュンク堂書店（池袋）などの書店、都民情報ルーム（都庁第一庁舎3階北側）、三省堂書店（都庁店）で販売されています。1冊640円。

新教育課程との関連は？

ゆとり教育を批判して改訂された新学習指導要領高等学校編は平成20年度に告示され、周知徹

底の1年間を経て、22年度より一部先行実施され、正式実施は25年度より。卒業までの修得単位数は現行指導要領と同じ74単位、科目「地理歴史」では世界史が必修、日本史・地理から1科目必修で、日本史は必修とはなっていません。

東京都が、日本史必修、内容は東京都の設定した独自科目「江戸から東京へ」と決定したことは、学習指導要領の枠を超えるのではないかと思います。今回の講師佐伯眞人氏は学習指導要領作成に関わった経歴もあり、「江戸から東京へ」の監修者ではあるが、どう実施すべきかについては、指導要領の枠の中でという考え方と思われます。

講演の内容

このテキストの監修者3名のうちの一人であり、ます。東京都の依頼で関わりましたが、実際は都立高等学校の諸先生が精力的に作成にとりくみました。私は以前、文部省にいたときに学習指導要領の作成に取り組みましたが、特に日本史Aができた時を思い出します。それまでの、知識偏重ではなく主題学習を通して歴史を見るといった学習のあり方を取り入れ、日本史Aに「歴史と生活」、日本史Bに「歴史の考察」を設定しました。今回の指導要領にもこれらは取り入れられています。

東京都のこのテキストは、ページを開けますと左側に学びの窓というかたちで課題が設定されており、右側にその内容について触れる形をとっています。この、課題を出してそれについて答えるという形でテーマ性の強いものになっており、江戸時代の部分は日本史Aの範囲から外れますが、日本史Aの代替としてこれをつかった授業が行われることは問題ないと考えます。

34のテーマで江戸時代から現代までが構成されており、他に9の特集が組まれています。大変よく工夫されており、「歴史散歩」などのテキストとしても評判がよいとのこと。「江戸・東京博物館」では、ボランティアさんの必携書となっているそうです。

日本史Aのみでの利用ではないと思いますので、

その場合は歴史の教員としてのみなさんに是非リーダーシップをとっていただきたくようお願いします。新しいことへの取り組みは試行段階でうまくいき成果が上がっても各地域にはなかなかうまくおいていかないことが多いのです。身近な地域の教材であるのはやはり関心が増します。但し、注意しておいていただきたいのは中学で学んだことの繰り返しにならないように、ということです。(村木記)

お誘い、——

平泉・奥六郡の旅へ

小澤拓美

都歴研友の会では、独自企画として、平泉・奥六郡の旅を企画しました。大震災の復興にかける東北支援の一環にもなればと思います。メインテーマは、北上平野（奥六郡）を主な領土として華開いた奥州藤原氏3代の栄華と終焉をたどることです。歴史的な順序で訪問地をご紹介します。当然ですが、実際の訪問順とは異なります。

平安期の京都政権（朝廷）の東北支配の拠点である胆沢城、志波城を訪ねます。北上川とその支流をいわば外濠として、北からのいわゆる蝦夷勢力を防ごうという立地条件が見えると思います。

一方で、その蝦夷勢力の中心となった安倍氏の城柵を訪ねます。安倍氏は、衣川地区に本拠を構え、北上川沿いに12の城柵をもったとされています。東北の大動脈、北上川は、物流・軍事等に大きな役割を果たしました。その要所には関がありましたが、白鳥館は最大の重要な関門でした。よく発掘され、当時の姿が明らかにされているのは鳥海柵です。ここは、安倍の総帥、頼時死去の地であり、堀などによく城柵の姿を伝えてくれます。

その東方には、朝廷側から安倍に転じた藤原経清の豊田館があります。経清は、頼時の息子である安倍貞任を最後まで助けて前九年の役を戦いましたが、ついに盛岡北方の厨川に敗れます。源頼

義は、経清を憎んで8寸の大釘でさらし首にします。厨川柵跡で両軍の戦いを偲んでみましょう。

高橋克彦が「炎立つ」で描いた、源義家と安倍との壮絶な戦いが目に浮かぶようです。経清の子が清衡です。幼年にして父を惨殺され、敵将の後妻に入った母の連れ子として育った清衡が、清原・安倍、そして京都政権側との虚々実々の駆け引きと戦いを繰り返す後三年の役の結果、ついに陸奥・出羽を統一いたします。

清衡は、10年ほど父の館である豊田館を本拠として政権を固め、やがて、国境線である衣川を越えて、平泉地区に壮大な寺院と官庁街を築きあげます。

ユネスコに対する世界遺産申請書に「浄土」と記したのは、残念ながらイコモス（国際記念物遺跡会議）ではあまり理解されなかったようですが、出願者の心情はよくわかります。

清衡は、まず関山の上に一基の塔をたてて、奥州平安のよすがとしました。普通は立ち入れないここに今回の旅では特別許可を受けて入れると思います。

平泉には、つぎつぎと壮麗な寺院が建設されていきますが、ほぼ完形として残るのが国宝建築物第一号の金色堂です。これは、阿彌陀堂として造られたのか葬堂か、基壇・泰衡壇はどれか、初めからの仏像はどれかなどいくつもの疑問があります。しかし、仔細に見れば見るほど、華やかにして安らかな浄土への願いが浮かび上がってくる、見事な工芸・建築であることは確かです。特に、48の仏のまします螺鈿蒔絵の柱は、地と天と結ぶ意味を持ち、ギリシャ建築のオーダーや諏訪大社の御柱など、古今東西の柱信仰との関連も考えてみると興味深いものがあります。

かつて経蔵にあったであろう金銀字交書一切経は、円仁（慈覚大師）が中国五台山で拝観して感激したことを記録していますが、日本では清衡の政権で初めて作成されたものです。京都政権もできなかった文化的偉業を成し遂げた平泉の文化・経済力の高さを物語ります。この経典は、秀吉政権の時、多くが関西に持ち去られますが、残され

た一部が讃衡蔵という宝物館で見られます。

この宝物館では、やはり円仁がかの地で出会ったことを「入唐求法巡礼行記」に記している騎師文殊菩薩像も必見です。近頃、塗装を新しく平安期の姿が戻りました。

基衡の時代は一見地味ですが、毛越寺を建設しています。これは、平泉の入り口にあたり、京都の法勝寺をモデルにしたものではありませんが、金堂である円隆寺は京都の寺院以上にきらびやかであったとのこと。それに並ぶ観自在王院は、基衡の妻であり、安倍宗任の娘でもあった女性によって建立されました。その北東隅にあるこの女性の墓も忘れず詣でることにしましょう。

秀衡は、金鶏山をバックに、平等院を規模で上回る無量光院を築くなど文化事業の推進とともに、源平対立の難しい時期にあって東北政権の維持のため苦心します。この時期の政庁として考えられるのが、柳の御所です。遊水地及びバイパス建設予定地にありながらろうじて保存されることになったここは、史跡公園として整備が進められています。資料センターでは、我が国唯一の「村印」など貴重な展示が見られます。

義経の2回にわたる平泉逃避行が、奥州藤原氏を滅亡に導いたという言い方がありますが、はたしてそうでしょうか。特に泰衡に対して凡庸、愚鈍のような扱いはどうも疑問です。

平泉政権は、鎌倉幕府に対してよく戦った、というべきだと思います。主戦場は、はるか南方、福島県の厚加志山で、ここに長大な防衛線を築いて戦ったのは立派と言うべきでしょう。それに対して、頼朝は断固として北方政権を滅ぼし、征夷大將軍を名実ともに実現したかったのだと思うのです。

泰衡政権が火をかけて脱出した平泉を占領した頼朝は、その文化の高さに舌を巻きます。二階大堂は、京都にも、勿論鎌倉にもない大阿彌陀堂でした。それをまねて、鎌倉に官寺である二階堂永福寺を建立したのは有名な話です。この寺が、鎌倉にあって、頼朝の奥州進発の地点にあるのもよく分かります。

頼朝は、平泉からさらに進んで陣が岡に向かいます。ここは5代前の頼義が陣を張ったところです。ここで、泰衡の首が届けられたので、藤原経清を処刑したのと同じやり方で8寸釘のさらし首にします。しかし、首は如何なるルートによってか平泉に届けられ、金色堂に納められます。首桶には、陣が岡に近い五郎沼産と思われる蓮の実が80粒あまり納められ、つい数年前に七百数十年ぶりに開花に成功しました。これが中尊寺蓮です。

頼朝は、陣が岡からさらに進み、安倍氏滅亡の厨川まで行きます。義仲や、平氏を滅ぼしたときとは比べ物にならない執拗さです。かくして、獲得した征夷大將軍の地位は、その後長く武士政権の長を意味することになります。この経緯をみると、「夷」とは単に北方のまつろわぬ民ということではなく、直接的には奥六郡の人々を指すべきだと思います。安倍氏や奥州藤原氏の経済力・軍事力は日本の古代政権に大いに脅威を与えた存在であったのでしょう。

長い歴史の恩讐を超えて、今また、東北は日本のみならず世界の大きな注目地です。歴史を学ぶものとして、東北を歩きつつ越し方行く末を考えてみたいものです。ご参加くだされば幸いです。

平泉・奥六郡の旅 ご案内

日程 2011 (平成23) 年10月23日 (日) ~25日 (火)

訪問予定地 ★は今回の世界遺産申請遺跡☆は前回

1日め 10月23日 (日)

〇一ノ関駅集合 11:00

・高館・芭蕉句碑☆柳の御所遺跡★無量光院★金鶏山★観自在王院・基衡妻の墓★毛越寺☆達谷窟☆長者が原廃寺

〇ホテル武蔵坊 泊

2日め 10月24日 (月)

★中尊寺(西行歌碑→本堂→願成就院宝塔→金色堂→芭蕉句碑→経蔵→開山堂→仁安の五輪塔→白山神社→讃衡蔵→観音院→大池跡) ☆白鳥館・黒石寺・豊田館跡・胆沢城跡・鳥海柵 〇鉛温泉 (藤三旅館) 泊

3日め 10月25日 (火)

・陣が岡・志波城跡・盛岡城・啄木歌碑・厨川柵

〇盛岡駅解散 15:30 ころ

申し込み締切 2011 (平成23) 年7月15日 (金)

定員 15人 (先着順、定員になりしだい締めきり)

会費 宿代14000×2=28000円、車代5000円、拝観料・イヤホンガイド等5500円 約38500円、往復は各自負担

申込先 189-0026 東村山市多摩湖町4-14-13 小澤拓美

FAX: 042-391-9500 Eメール: oz22@beige.plala.or.jp